富山県氷見市朝日長山古墳

調　査　報　告　書

1973年3月

氷見市教育委員会

“報告書発刊に寄せて”

本市の朝日長山古墳は昭和２５年４月、道路拡張の際の土砂採掘中発見されたもので、昭和２７年３月に至り、氷見高等学校歴史クラブにより発掘調査することになった。場所は高校登校道路の直ぐ脇にあるので、当時校長として毎日此の道路から通勤していた私は特に此の発掘に興味をもったものである。此の時発掘された直刀、鉄環、土器等は学校に保存することにした。この初回発掘では調査困難な地点が一部残されたのであるが、昨年９月その地点が宅地造成のため除去されるとの知らせをうけ、直ちに所有者に対し工事延期を申し入れるとともに、県教育委員会文化課と連絡をとり、緊急に第２回の発掘調査をすることにしたのである。

幸い初回発掘当時、歴史クラブ主任であられた斉藤道保先生が、現在同高校長として、同校白岩、奥田両先生と共に多大なご協力を賜り、同校歴史クラブ員各位の熱意によって発掘が進められ、多くの出土品を見たことは感謝にたえない。

国土開発と文化財発掘が全国的に進められる今日、朝日長山古墳の発掘にも意義深いものがあると思うのである。本報告書は朝日長山古墳についての調査の結果が、極めて詳細に記録されており、貴重な資料となると信ずるのである。

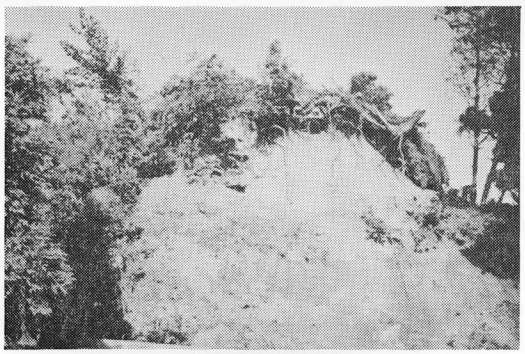
この報告書作成にあたってご努力下さった斉藤校長先生、白岩先生、奥田先生に、更めて深く敬意を表する次第である。

昭和４８年３月

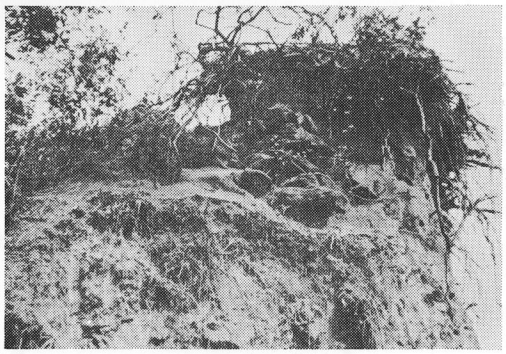
氷見市教育委員会

教育長　村　田　豊　二

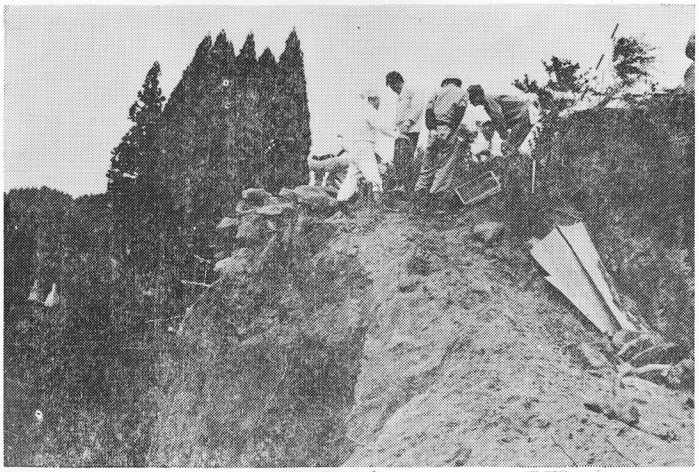
長山古墳の遠景（中央部ショベルカーの左手丘陵上）



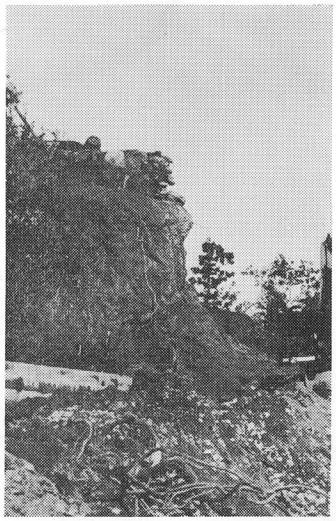
古墳の南傾斜面



露出した石室一部

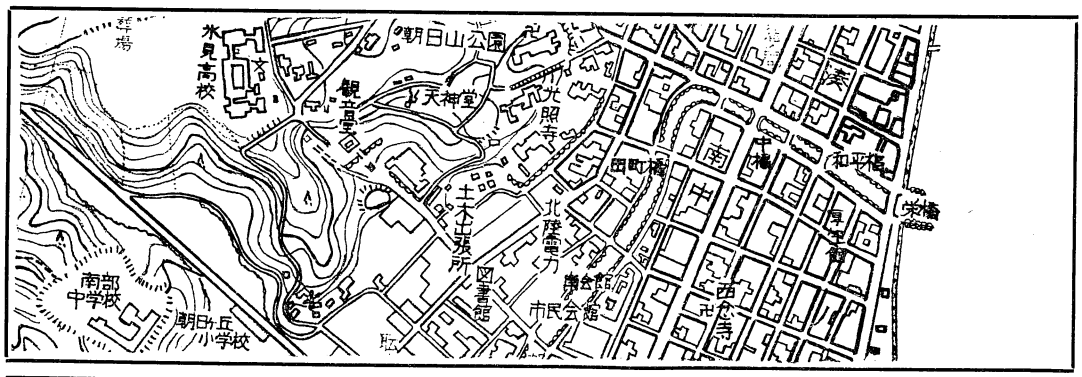


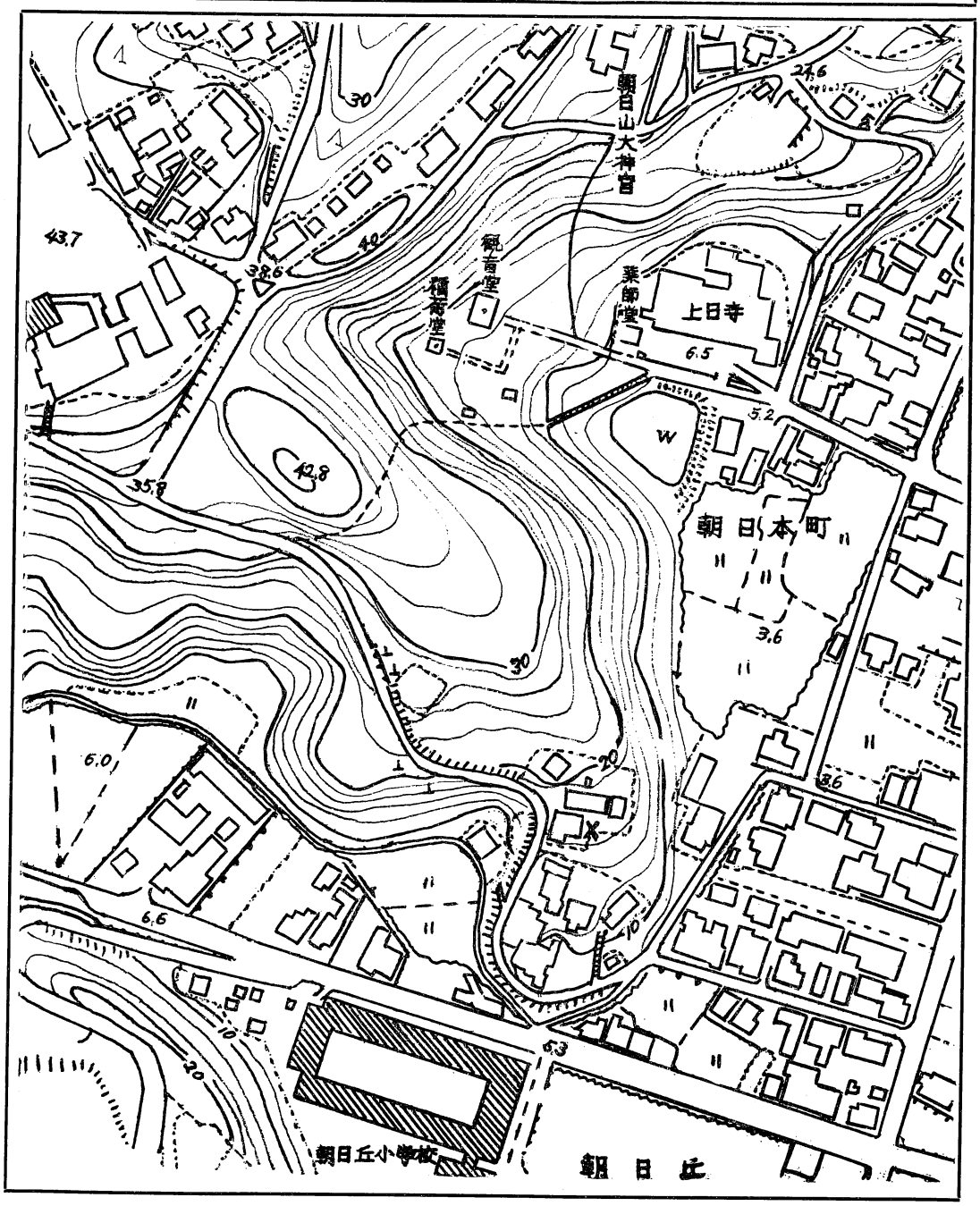
発掘作業



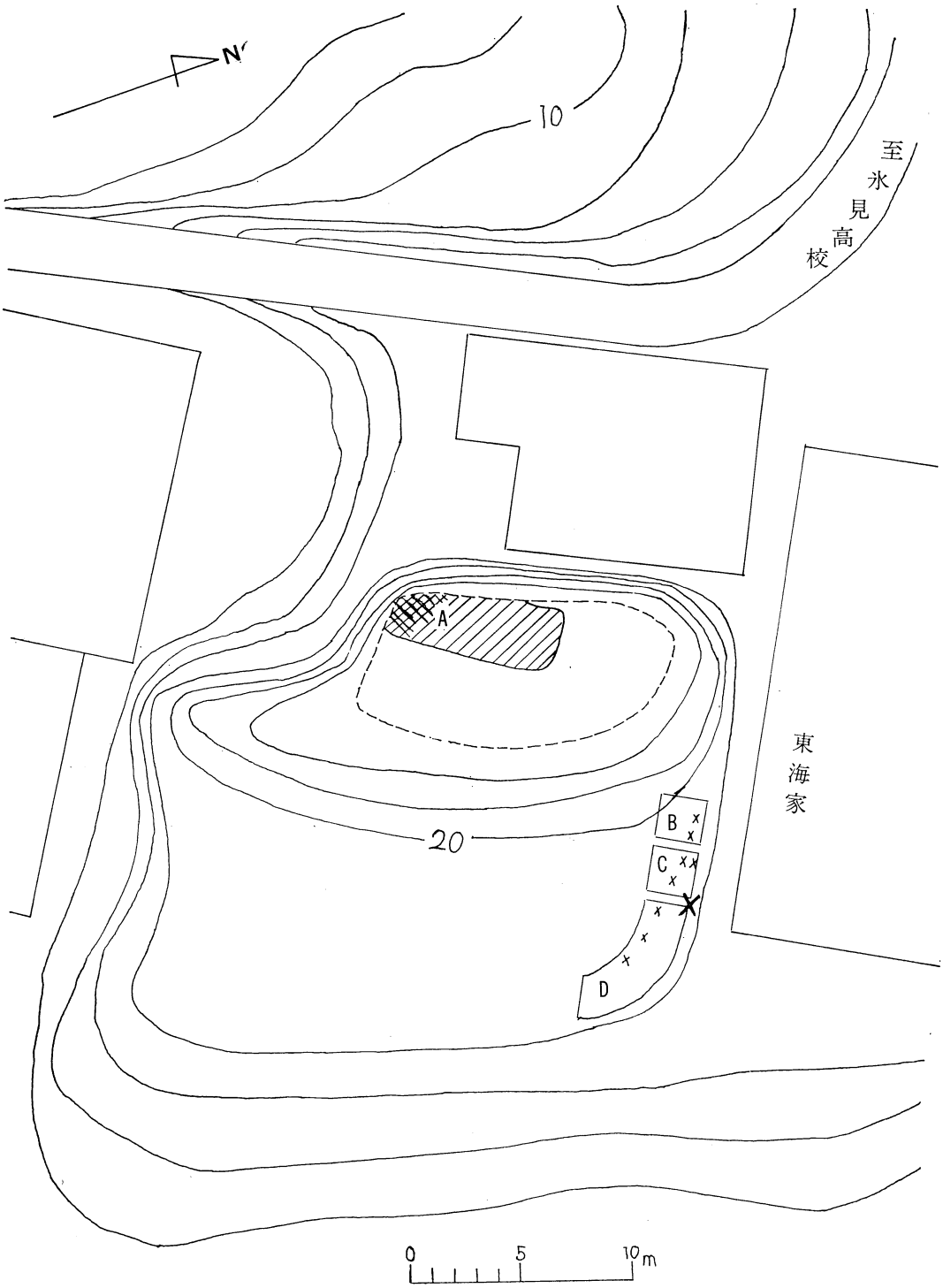
崖上に残った石室部分

遺跡ならびに発掘状況

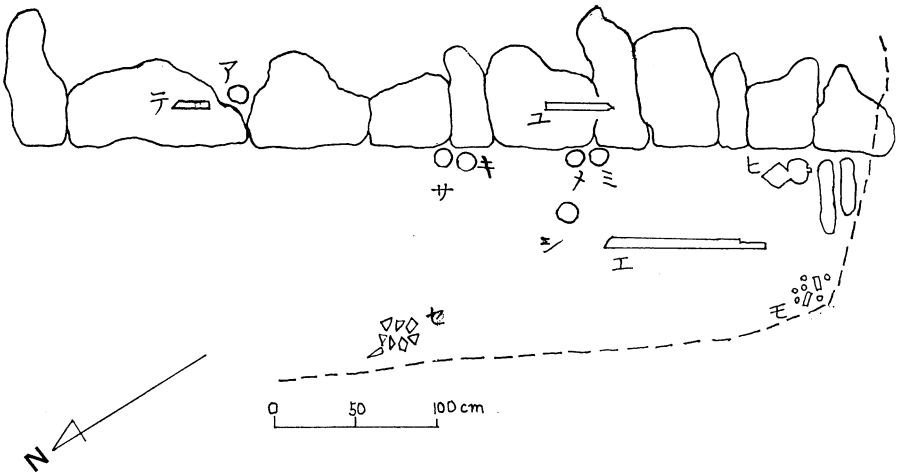




1図　地　形　図　　×が古墳。上図は10,000分の1。下図は2,500分の1。

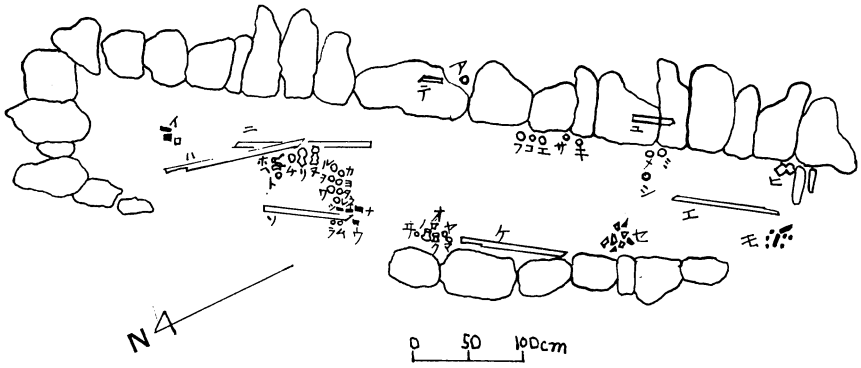


2図　古墳平面図　A…石室　▩今次発掘分。B,C,D…埴輪片出土地点×印大型のもの



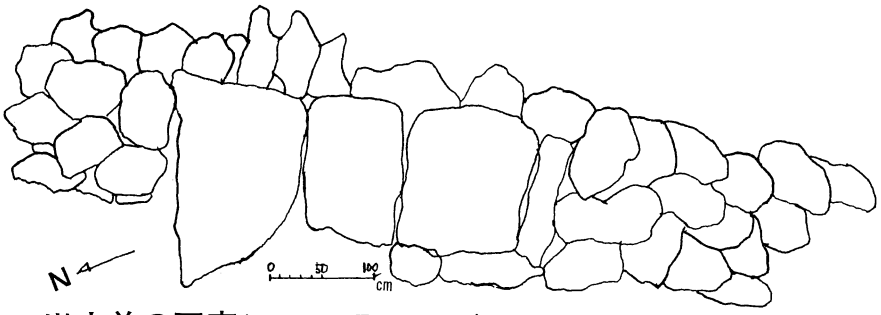
Ⓐ遺物出土状況(昭和47年度)

短剣…テ　盌…ア　蓋付坏(須恵器)…サ　坏(土師器)…キシメ　鉾先…ユ
壺(土師器)…ミ　直刀…エ　杏葉…ヒ　管玉・丸玉…モ　鉄地金銅張り破片…セ



Ⓑ遺物出土状況(昭和27年度と昭和47年度をあわせたもの)

鉄鏃…イナ　鉄片…ロウ　直刀…ハニソケエ　刀子…ツネ　鉄環…ラム　短剣…テ
鉾先…ユ　杏葉…リヒ　土師器壺…ホミ　盌…ヘトチフコエア　坏…キシメ
須恵器台付壺…ヌ　坏…ルヲワカヨタレキヤマサ　壺…ノ　高坏…オク
管玉・丸玉…モ　鉄地金銅張り破片…セ



Ⓒ蓋石撤去前の石室(上方より見たところ)

3図　古墳石室

1. はじめに

この朝日長山古墳は、昭和２５年４月土砂採掘中に発見され、翌年１２月までに土砂の取り除きがすすみ石室が崩壊しかけたので、２７年３月氷見高校歴史クラブによって緊急発掘調査が行なわれたものである。その折、松の大木の下にある石室の一部が調査困難のため残存したが、４７年９月に、ここが宅地化されるため墳丘部一切が平坦化されることになり、残存部の調査を実施する事になった。

９月２１日、古墳北麓にある東海家（２図参照）側方より円筒埴輪のやや大きな破片が出土した報をうけて現場に赴くと、すでにショベルカーによる古墳封土の除去作業が開始されようとしていたので市教委と連絡、工事の中止を求めて緊急発掘を実施することになった。

今回の発掘調査にあたり編成された調査団は次の通りである。

調査委員

村田豊二（氷見市教育長）
嶋尾正一（県文化財専門委員、氷見市文化財審議会会長）
湊　晨（県文化財専門委員、富山県考古学会会長）
斉藤道保（県立氷見高校長、日本考古学協会会員）

調査担当者

斉藤道保

調査員

白岩淳雄（県立氷見高校教諭、歴史クラブ顧問）
奥田直孝（同上、　同上　）

補助調査員

林　正一（氷見市教育委員会社会教育課勤務）

調査協力者

氷見高校歴史クラブ員

２年生　北元洋　新宅英隆　水元健蔵　吉坂田加夫　沢田登　杉木正人
草山美夜子　金谷まゆみ

１年生　伊藤賢治　奥村典子　上森優子　堀田かの子　谷口京子　棚田淳子
吉川差枝子　窪江智鶴

氷見高校理科クラブ員その他

事務局

局　長　脇方政美（氷見市教育委員会社会教育課長）
事務担当　広瀬祥亮（同　課勤務）
曾根芳明（同　課勤務）

2. 今次調査の経過

昭和４７年９月２１日午前、朝日長山古墳が宅地造成のため、明日からショベルカーなどが入るということと、さらに円筒埴輪らしいものが古墳の麓から出土したという連絡があった。早速、現場へ急行してみると、相当大型の円筒埴輪片が確認された（２図、古墳平面図の×印）。放課後、慎重にこの埴輪片を発掘してみると円筒埴輪の胴の部分であった。さらにその周辺を発掘したが、小破片が数箇出土したのみであった。宅地造成工事も始まるというので、市教委を通じて、工事の延期や、古墳発掘の手続を敏速にすすめた。

翌２２日、放課後から古墳の石室の未発掘部分の発掘にとりかかったが、（２図のA地点、石室部の南西部）松の大木の根や墓石があり、さらに石室の一部が崖の縁に面していた上、直下に民家があるので作業の能率があがらなかった。

作業は２８日まで、悪天候でないかぎり、放課後の時間と日曜日を利用して継続したが、須恵器の破片が若干出土したのみであった。

２９日になって、石室の上部から２*m*余の深さで礫床に到達し、ついに直刀一振が出土した。懐中電燈をたよりに６時半までかかって、直刀を学校の部室に持ち帰った。

３０日は土曜で、石室の槨石を南の崖の方から取り除くことにした。宅地造成のショベルカーの作業もすすんで、一部石槨を残して封土はほとんど削りとられてしまった。当日は杏葉一個と鉾先一振が出土した。

１０月１日は石室の槨石を全部、除去し、その大部分を学校へ運びあげた。大小２００個あった。この日はさらに短剣、土師器、須恵器の破片が出土し、封土は完全に消滅した。

かくて今度の発掘、調査が終了した。この間、最初に埴輪を出土した墳麓の付近は市教委の方を中心としたグループによる発掘が行なわれ、出土した埴輪の小破片は約２００個ほどであったが、埴輪の配列を想像できるような出土状況ではなかった。（２図、古墳平面図のB、C、D地域）

その後、出土品の整理をすすめ、土器の接着や補修をおこない、１１月２１日の文化クラブ発表会には、出土品の展示や調査結果を発表し、４８年２月１７日に調査委員の参加をえて、朝日長山古墳発掘調査報告会を催した。

３．今次の調査結果

調査結果は、前回（昭和２７年３月）の分と綜合して記述することにするが、これに先だって今回の発掘調査によって明らかになった点を記することにする。

㋑　石室様式（３図、ⒷⒸ参照）

前回の報告には未発掘部を羨道と推定し、横穴式石室ではないかと記してあるが、今回の発掘で前回の未発掘部は石室のつづきで、結局この石室は竪穴式石室であり、東西の壁は大きな石を積んであるが、南、北壁は小型の石を積んで石室をつくり、蓋石は中央部は大型の薄手の石３枚を当ててあるが、南北両端は、やや大型の石をもたせ積みにして蓋石としていたことがわかった。

㋺　出土品（３図ⒶⒷおよび図版１、２、４参照）

封土中からは出土品はなく、石室礫床上から直刀、短剣、鉾先、馬具の杏葉、鉄地金銅張りの小破片、管玉と丸玉、須恵器・土師器の壺、盌、坏などが出土した。

(ｲ)　金属器（図版１の７～１０、１２および図版４の実測図１～４）

直刀（図版１の７）１振、木装。礫がこぶ状になって何個も密着していた。全長１０１㎝、うち茎部１８㎝、目釘穴１、鍔はない。

短剣（同、９）１振、出土した場所が一番下の槨石の間であったためか、礫がついていなく、原形はよく保っていたが、茎部はほとんど欠けていた。全長２３．５㎝。鉄製。

鉾先（同、８）鉄製１振、木部はないが、これも槨石の下にあったので、原形を保っていた。全長３５．５㎝。

杏葉（同、１０）１枚、鉄地金銅張りで前回出土の杏葉と対をなしていると考えられる。剣菱形で１９．５㎝×１０．５㎝の大形である。

鉄地金銅張りの小破片（同、１２）　馬具の破片ではないかとも考えられるが、よくわからない。

(ロ) 玉器（図版1の11および図版4の5）

管玉（図版1の11）2個、青玉製でやや大小がある。一つは長さ2.6㎝、径0.9㎝。一つは長さ2.6㎝、径0.8㎝で、2個ともに穴は一方がやや小さい。

丸玉（同、11）6個、ガラス製で、平均の径0.6㎝、色は青紫色である。

これらの管玉や丸玉は崖の縁にあったのですでに何箇かは落下散佚してしまい、実際にはもっと多数あったと推定される。

(ハ) 土器（図版1の1～6および図版4の6～11）

土師器

壺（図版1の1）1個、胴部が球形の曲線をもった整った形のものである。接合し補修した。口径15.5㎝、深さ18.5㎝、最大幅20.2㎝、器面に模様はない。

盌（同、2）1個、口径14.2㎝、深さ5.3㎝口縁は内屈している。他に破片若干。

坏（同、3、4、5）3個、平均口径17㎝、深さ4.5㎝、口縁は外反し、内部を黒くぬってある。

須恵器

坏（同、6）1個、口径12.5㎝、深さ5.5㎝、坏部身のかえりが内傾していて、蓋を欠く。

(ニ) 埴輪（図版2の1、2、3、4、5、6と図版5）

今度の古墳の発掘は埴輪の発見から始まったのであるが、最初の埴輪の出土は、東海家すぐ横で東海家の庭から1m50㎝ほどの高さの墳麓からであり、径30㎝、深さ35㎝の穴（2図A）から掘り出された。市社会教育課員を中心とするグループが墳麓の北ならびに東部にそって2m四方2箇所（2図B、C）2mと5mの帯状（2図D）に深さ50㎝ほどのトレンチを掘って約200個の小破片の出土をみた。その後ショベルカーが墳麓部を掘り返したが他地点からは全く出土しなかった。

最初に出土した円筒埴輪の胴部の破片は、長径28㎝、短径26㎝の楕円形であり、高さ15㎝ほどである。これと同じ円筒埴輪の破片とみられるものも多いが、復元修理が出来ないほどバラバラである。ただこれらの多くの破片から考察するに、埴輪の種類は5種類前後と想像される。実際にどれほどの埴輪が、どのように配列されていたかは推定困難である。おそらく、畑作りの折に、すてられてしまったか、始めからごく一部があったのかさえ不明である。

なお昭和44年にもこの地点より20mほど北方地点から、埴輪の破片が数個出土した。

4. 調査結果の綜合

昭和27年3月28日より30日に至る第一次調査と47年9月21日より10月1日に至る第二次調査とによって、本古墳について、次のような点が明らかになった。

この古墳は朝日長山丘陵の最南端を利用して築造されたもので、深さ3mの切割をもって丘陵と墳丘部（標高25m）とを区切っている。

墳丘の封土は3m余の高さをもっていたようで、基底において東西20m余、南北50m余の広さをもっていたと想像される。円筒埴輪は、或はこの墳丘周囲（標高20m余の地点）に立てられていたとも想像される。

石室は、竪穴式石室で、墳丘中央部の墳頂下80㎝から2m30㎝位の間に位し、岩崎石と呼ばれる砂岩を積んだもので東西3m（内径90㎝）南北7m10㎝（内径5m80㎝）高さ1m50㎝の大きさで、中央部は3枚の大きな蓋石で、両端はやや大型の石のもたせ積で上部を覆い、内部は紅殻をぬり底部には砂上に川原石を一重に敷いて礫床をつくってあった。

遺物は、管玉・小玉の装身具、鉄地金銅張りの馬具杏葉類、直刀5振、鉄鏃2塊等の副葬品、

須恵器の異形の壷、高坏、壺、蓋付坏、土師器の壺、盌等の祭具があり、葬送具と思われる鉄鉾先、鉄剣先等があった。また石室上の墳土から碌が出土した。

馬具、土器の形式等からこの古墳の築造は古墳後期、6世紀前半ないし中頃のものと推考される。

なお詳細は次のようである。

〔1〕 所 在 地

氷見市朝日本町２４（１図の地形図参照）

市街地西部に横たわっている朝日山の南部は、長山と呼ばれる丘陵であるが、この古墳は、この長山丘陵の最南端、標高２５ｍの所に存在している。

東、南、西は急傾斜で平地に接し、北部の丘陵とは深さ３ｍほどの切割によって区画されている。氷見高校正門への道は、この南、西側中腹をぬってのぼってゆくのである。墳丘の頂に立つと、東方に富山湾が望まれ、阿尾の崎から雨晴に至る広々とした海がひろがり、南方には二上山が美しい。西方は朝日山続きの丘陵に囲まれた谷間に家屋や水田がある。はじめ頂上は一部墓地として利用され、数基の墓石が存在し、松の大木が数本そびえていた。

〔2〕 構　　造

(1) 外部の構造

この古墳は土砂採取のため、石室の一部が露出するほど原形が失われていたが、丘陵末端を利用した円墳であったと考えられる。東、南、西側斜面は、道路をつけたり家屋を建てたりするため、削られたりならされたりしているが、古墳築造当時は、東および西側は各約４０度の傾斜、南側は２０度くらいの傾斜であったと想像される。また北側の稜線は深さ３ｍほどの切り割りによってたたれていたものと考える。墳丘頂部は第一次発掘当時、東西１３ｍ、南北１６ｍの平頂をもっていた。

石室南端の露出しているところは封土も切り立った様に削られていたが、そこからみると平頂下２ｍ３０㎝の石室底部に当る高さに、薄い黒土層が左右にひろがって存在する。この黒土層より上部は、石室を築いて後、封土として石室を覆ったものではないかと考えられる。

葺石・周湟　こういうものは認められないが、強いていえば平頂より２ｍ７０㎝下った墳麓に幅６～１０ｍの削平地がある。埴輪片が相当出土した地点を含んでいるが、後世の人手が相当加えられている事から考えるとはたして築造当初からのものと考てよいか断定はしにくい。

(2) 内部構造（３図古墳石室参照）

石室は竪穴式石室で平頂下８０㎝から２ｍ３０㎝の間に存在し、長軸は北東（正北より４０度東）から南西に向かっていた。この石室の北西壁は、すでに土砂採取のために崖下にくづれ落ちて居り、復元が困難に近い程であった。

石室は岩崎石と呼ばれている砂岩で、長径３０～８０㎝、短径２０～３０㎝、厚さ１０㎝前後のものを積み重ねてあるが北西、南東壁はやや大型の石材で美しく切りたったように積み、南西、北東壁はこれよりは小型の石材をつめこんだように積んである。この上部を３枚の扁平な大型の蓋石を中心として覆った長方形のものである。この石室は外部において、北東～南西７ｍ１０㎝、南東～北西は北東端で３ｍ、ほぼ中央で２ｍ６０㎝、南西端で２ｍ４０㎝であった。蓋石は、石室北東部および南西部では数個の中型の大きさの岩崎石をもたせかけて蓋石にしてあるが、中央部は３枚の大きなものをつかっていた。北より南へ向って一枚目のものは長さ１ｍ４５㎝、幅９０㎝、二枚目のものは長さ１ｍ８０㎝、幅７５㎝、三枚目のものは長さ１ｍ６５㎝、幅９０㎝で、いずれも厚さ１０～１５㎝であった。三枚の蓋石はすべて北西側が石室内に落ちこんでいた。石室内部は長径（北東～南西）５ｍ８０㎝、短径（南東～北西）９０㎝、高さ１ｍ３０㎝～１ｍ４０㎝の広さであった。

底面には径５～８㎝の川原石を一重に敷きならべてあった。やや北東部が高い感じがした。この礫床下には砂が２～３㎝敷かれてあり、中央部の一部と北東端一部には貝殻が僅かに見受けられた。蓋石裏面、側壁、礫床面には全面、ベニガラが検出された。

なお、側壁の岩崎石のなかには、蓋石をうけるための切り込みと考えられるものをほったものが２個みられた。

〔３〕　遺物とその出土状況（３図ならびに図版１～６）

(1)　概　　況

封土中からは璟１個が出土した。石室内礫床上からは副葬品として直刀、短剣、鉾先、刀子、鉄鏃、馬具の杏葉、鉄環、三繋の飾金具、祭具として須恵器・土師器の高坏、台付壺、壺、盌、坏等が出土した。出土状況は３図Ⓑの遺物出土状況を参照していただきたい。なお木棺は残存していなかった。

(2)　出土遺物

①金属器（鉄器）

直刀（図版１の７、同３の１３）５振、いずれも木装である。(イ)茎部一部を欠く。全長１０５㎝、うち茎部１９．５㎝。目釘穴２、鍔はない。(ロ)全長１１５㎝。うち茎部２２．５㎝。目釘穴２。(ハ)刀部中央７３㎝のみあり。(ニ)全長１１２㎝、うち茎部１８㎝である。(ホ)全長１０１㎝うち茎部１８㎝、目釘穴１。

刀子２振。(イ)木装。全長１１㎝、うち茎部４㎝。(ロ)木装。全長９．８㎝、うち茎部３．２㎝であった。

短剣（同１の９、同２の９）１振。全長２３．５㎝茎部を欠く。石室東側の槨石下から出土。

鉾先（同１の８）１振。全長３３．５㎝、袋部長さ１３㎝、口径２．８㎝。東側の槨石下から出土。

鉄鏃（同３の２）　約５０本近い塊となって２箇所にあった。いずれも細根式のもので鋒につづく棒状部を矢竹が挿み、さらに桜の皮と思われる樹皮で、この上をまいてあった。(イ)細長い棒状体の先端の鋒はふくらみのある三角形をしている。全長８．７㎝位。　３６本が一塊となり、他に１０本程散在していた。(ロ)前者より、やや細長い鋒で、　なかには鋒が３．６㎝もある長いものもあって、これには「返し」がついていた。合わせて５０本程が一塊となっていた。

飾金具　長さ１３㎝位、　巾２．５㎝の長方形板状の金具で、鋲で布にとめられてある。約１０点出土している。三繋の飾金具と思うが、鉄鏃の近くに２箇所に分かれてあったから、あるいは靫類の紐の金具かもしれない。金銅張りである。

同上（同１の１２）、鉄地金銅張りの小破片。

鉄環２個　(イ)馬具か跨帯の締金具状のもの径約５㎝で蝶番状の部分がある。(ロ)長径７㎝の環。

杏葉（同１の１０と同３の１）２個　鉄地金銅張り。剣菱形で、楕円形と剣菱形との結合された形。６世紀前半の形式、２２．６㎝×１０．４㎝と１９．５㎝×１０．５㎝の大形のものである。

②玉器

管玉（同１の１１）２個、青玉製、長さ２．６㎝径０．９㎝。長さ２．６㎝径０．８㎝。

丸玉（同１の１１）６個、ガラス製、青紫色、径０．６㎝前後のもの。

③須恵器　壺、台付壺、高坏、蓋付坏、坏などで６世紀前半の陽徳寺形式に類似している。

壺（同３の４）１個　胴部の球形の滑らかな曲線をもったもの。口径１０．７㎝、深さ１５．６㎝、最大幅１９．２㎝のもので器面には模様はないが一部に灰釉と思われる黒い部分がある。　底部に蓆文がある。

台付の壺（同３の１１）１個　台付の壺の上にさらに壺がのっている形。　壺の口径６．２㎝、深さ６㎝、これに高さ１１．２㎝の台付の壺がついている。　壺の胴部中央を櫛目波形文が細かく

とりまき、台部には櫛目押型文が1㎝幅に取りまき灰釉がある。

高坏（同3の3）2個　(イ)坏の口径28㎝、深さ7㎝で割合に深い。台部は太く高さは12㎝で2段のすかしは長方形と三角形である。坏部には口縁に平行な二本の沈線が口辺を少し下がったところにつけられ、台部には波状櫛目文が2段についている。(ロ)三脚、坏部口径11.4㎝、深さ4.2㎝台部高さ8.2㎝、径部に一条の波状櫛目文がつけられている。灰釉がかかっている。

蓋付坏（同3の6）約10個体　坏部身のかえりがやや内傾している。口径12.5㎝前後、深さ5.5㎝前後のもの。

瑯（同3の5）1個　石室上の封土中より出土した。高14㎝、壷部径8.1㎝で、口頸部は握りやすいようにのびてきているがまだ太い。

④土師器　壺、盌、坏などで土器形式は鬼高式形式に類似している。

壷（同1の1）2個　口径15.5㎝、胴部最大幅20.2㎝、深さ18.5㎝、胴部の球形の滑らかな曲線をもった美しい形。他に口辺部のみのもの（図版3の12）もあった。

盌（同1の2、同3の8、9）約5個　口径15㎝深さ4.5㎝、口径14.2㎝深さ5.3㎝等で口縁は内屈している。

坏（同1の3、4、5と同3の10）約6個　口径17.5㎝、深さ5㎝ほどのもので口縁は外反し、内部を黒くぬってある。

⑤埴輪

円筒埴輪（図2、5）5種類以上で厚さ1.5㎝位の破片のみ。径26～28㎝位の円筒埴輪と推定される。

5. おわりに

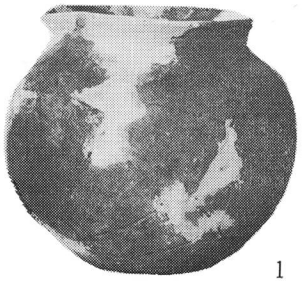
昭和27年度と昭和47年度の2回の発掘調査ののち、朝日長山古墳は消滅した。前回の未発掘部分からも、各種の出土品があり、特に埴輪の出土は貴重であった。

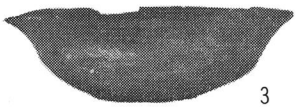
ただ今次の調査は宅地造成の背景でなされたため、時間的余裕がなく、十二分の調査の余裕がなかったのは残念である。また埴輪がどのようにならべられていたか、短剣や鉾先が槨石の下から出土したこと、杏葉が2個はなればなれに出土したことなどをどう解釈すべきかも残された問題である。

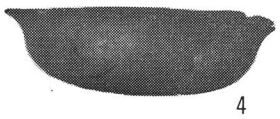
なお調査報告をまとめるに当り、奈良国立文化財研究所の各位のご指導を得たことを記して感謝の意を表します。

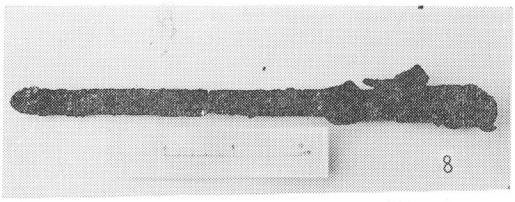
朝日長山古墳関係文献

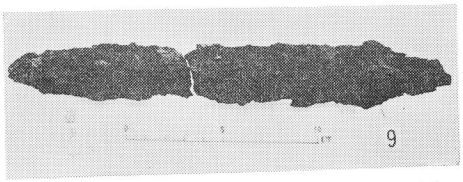
「朝日長山古墳発掘調査報告書」氷見高校歴史クラブ報告書*No.* 4　昭和27年
「富山県氷見地方考古学遺跡と遺物」同クラブ報告書*No.* 11　昭和39年

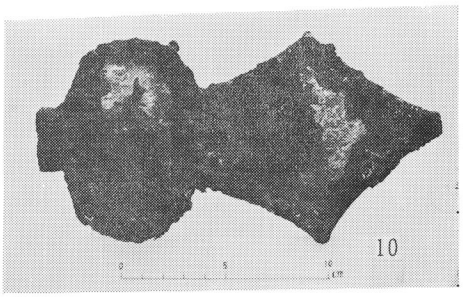


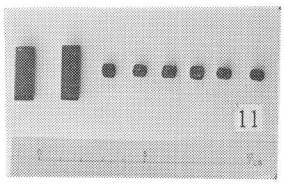


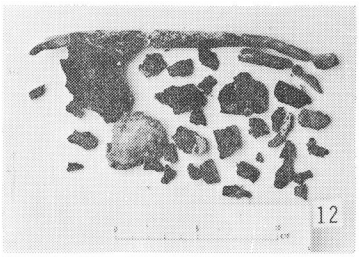








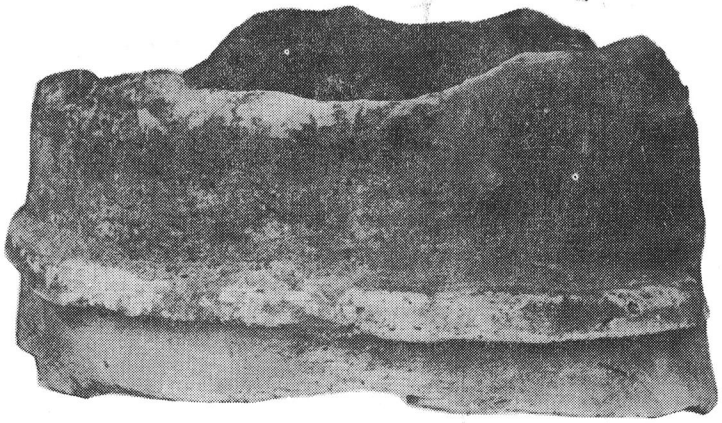




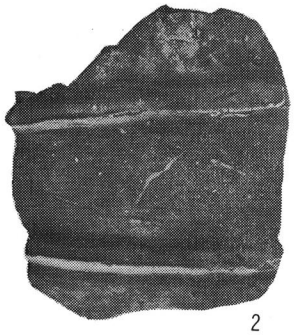
0 5 10cm

1壺　2盌　3～5坏　6須恵器坏
7直刀　8鉾先　9短剣先
10杏葉　11玉　12鉄地金銅張り破片

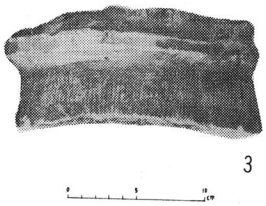
図版Ⅰ（昭和47年出土）



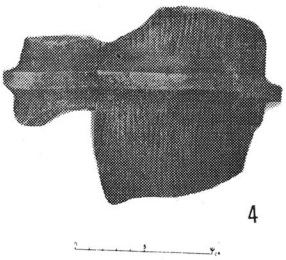
1



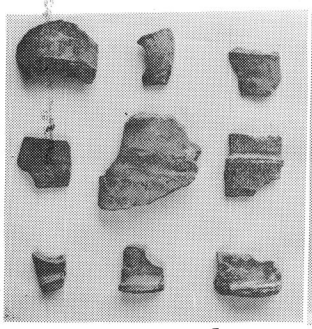
2



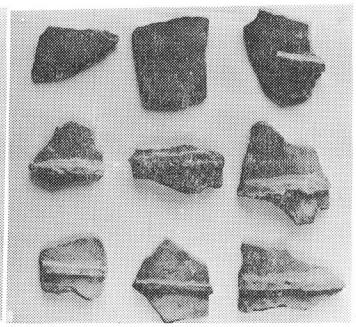
3



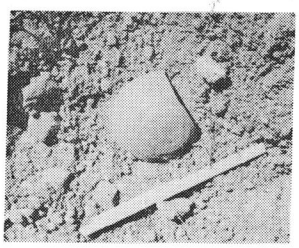
4



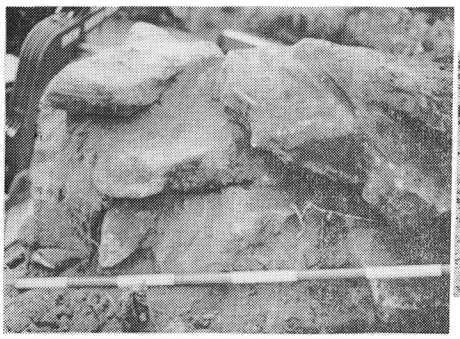
5



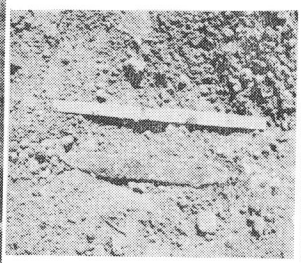
6



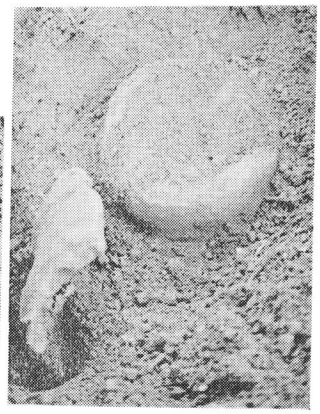
7



8



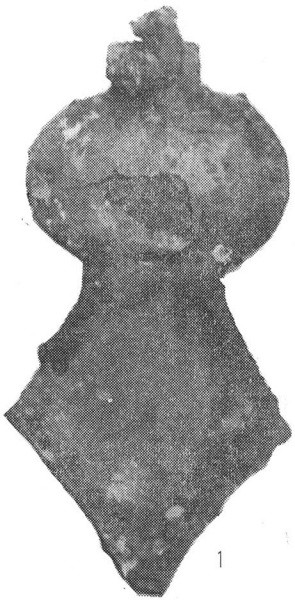
9



10

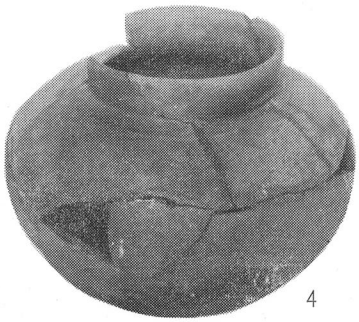
図版２（昭和47年出土）

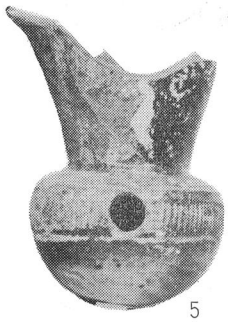
１～６埴輪片　７盌の出土　８石室石組み外側
９短剣先の出土　10円筒埴輪の出土


1

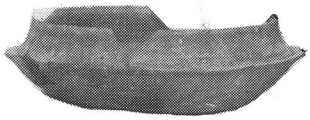
2

3

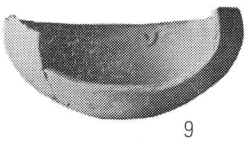

4


5

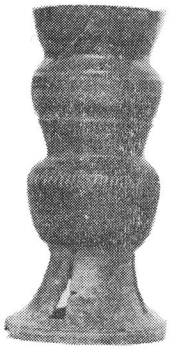
6

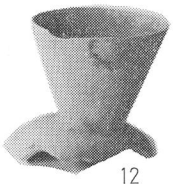

7

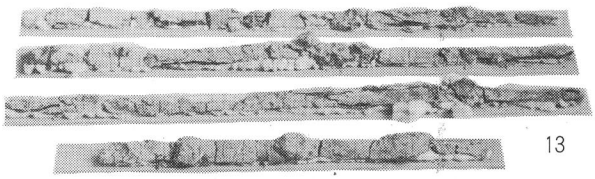
8


9

10

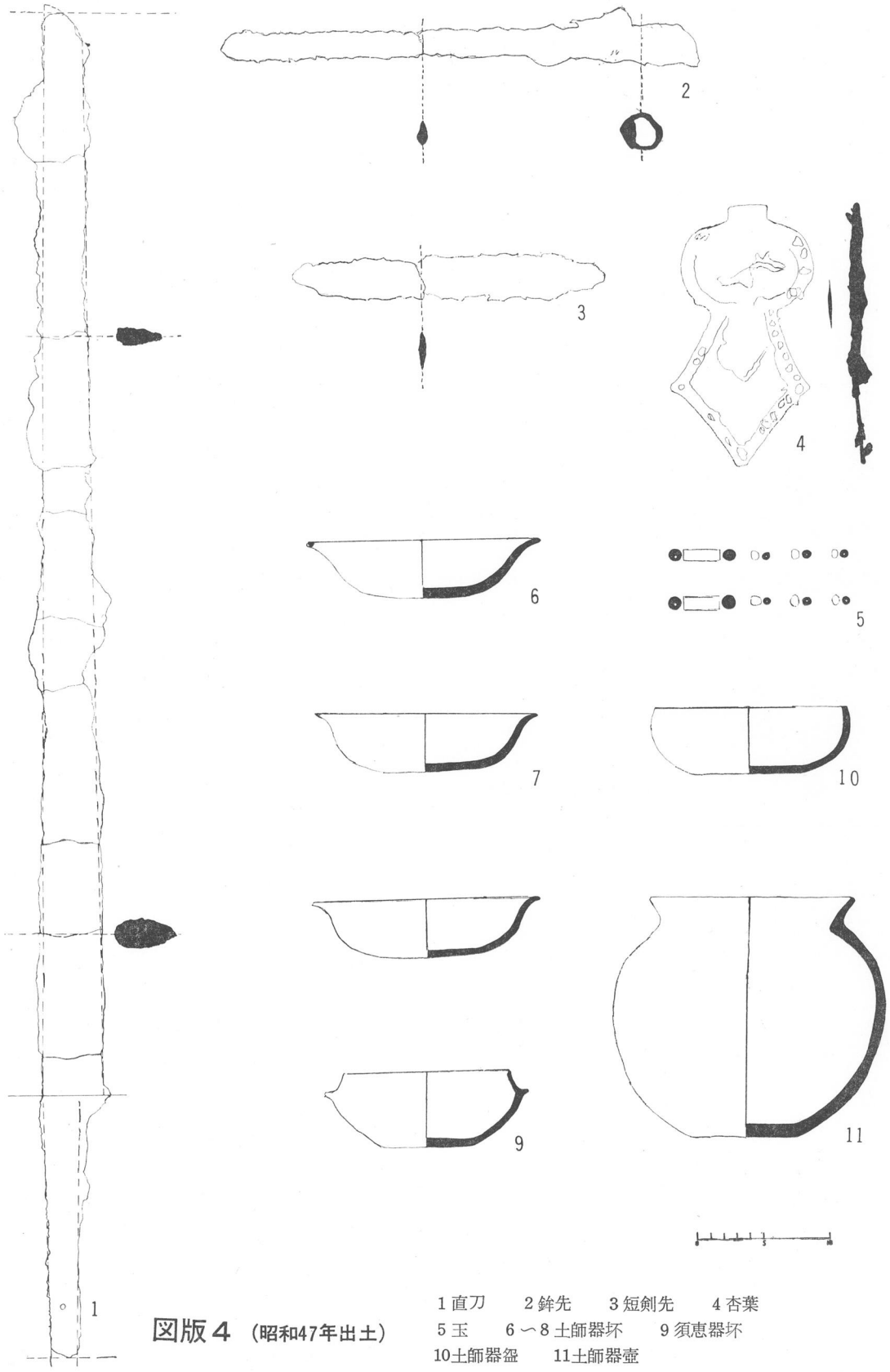

11


12


13

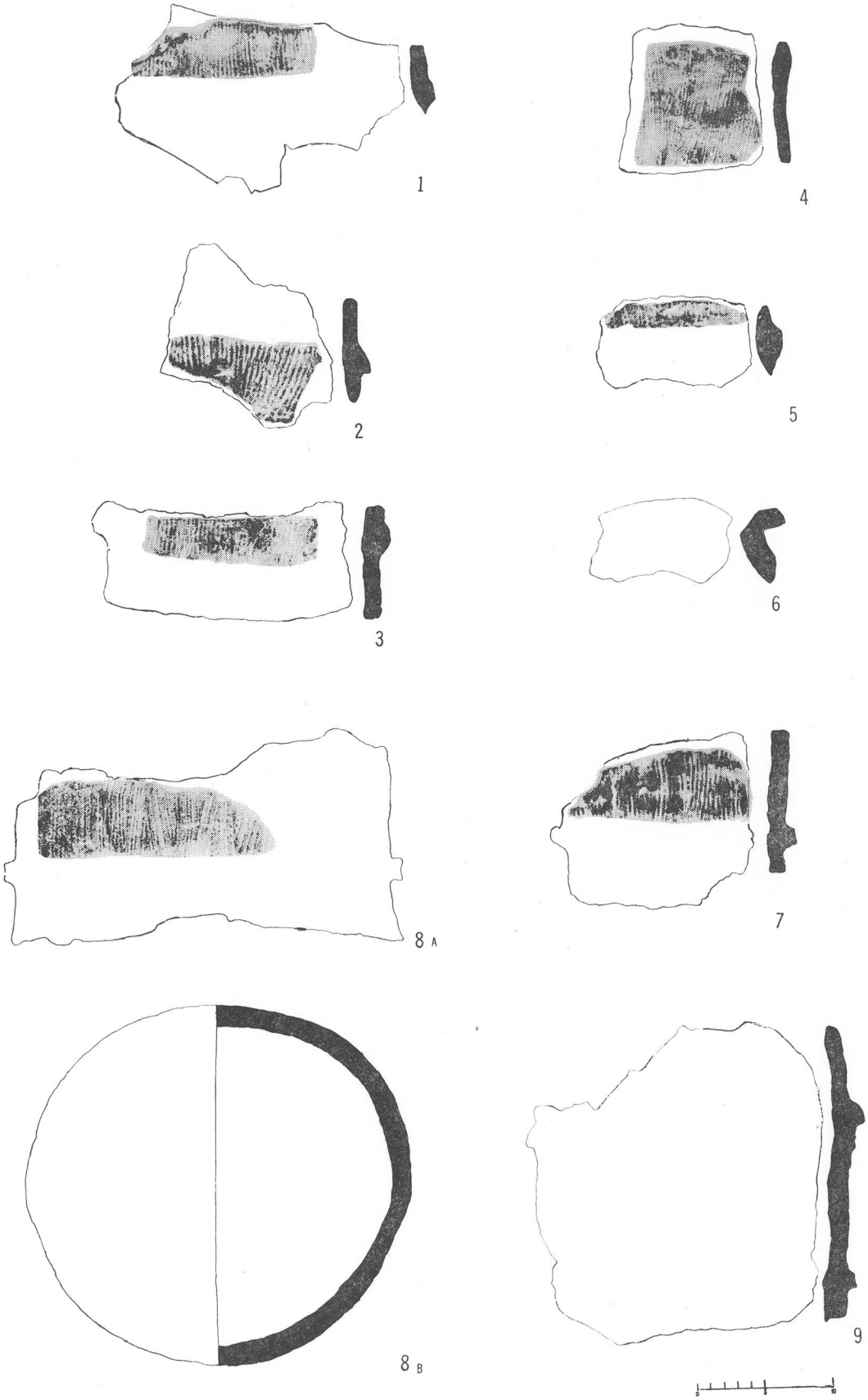
1～12は約1/5の大きさ
1 杏葉　2 鉄鏃塊　3 高坏　4 壺　5 瓦泉
6～7 坏　8～9 土師器盌　10土師器坏
11台付壺　12土師器壺口辺　13直刀

図版3（昭和27年出土）



図版４（昭和47年出土）

１直刀　２鉾先　３短剣先　４杏葉
５玉　６〜８土師器坏　９須恵器坏
10土師器盌　11土師器壺



図版５（昭和47年出土）　　１〜９埴輪

図版６（昭和27年出土）

１～２　須恵器高坏　３須恵器壺　４瓦泉　５台付壺
６～10須恵器坏　11、13、14土師器盌　12土師器坏

昭和48年3月　日発行

発　行　氷見市教育委員会

印刷所　菊華堂印刷株式会社